

令和二年（二〇二〇）三月二十六日発行  
『大倉山論集』第六十六輯抜刷  
（公益財団法人 大倉精神文化研究所）

# 自他を善化し、万物を浄化する

— 今泉定助のミソギとハラエの意義を読み解く —

西岡和彦

# 自他を善化し、万物を浄化する

—今泉定助のミソギとハラエの意義を読み解く—

西岡和彦

## 目次

はじめに

- 一 今泉定助年譜
- 二 今泉定助翁の三大名著
- 三 『大祓講義』について
- 四 今泉定助と大倉邦彦
- 五 大倉邦彦の宇宙心
- 六 今泉定助と川面凡児
- 七 大祓とは何か
- 八 今泉翁の善悪交替論批判
- 九 禊祓は身だけを浄化するのか、それとも心までも浄化するのか
- 十 祓と禊とは何か—今泉翁の神学的解釈—
- 十一 禊祓の意義

十二 神の子は神である

十五 神人合一した人の使命

十三 神の魂に還ることが大祓の眼目

おわりに

十四 人を祓う資格Ⅱ被戸の神になること

### はじめに

國學院大學から参りました西岡和彦と申します。本日はお忙しいところ、この講演会に足をお運びくださいます、誠にありがとうございます。御礼申し上げます。

本日お話し上げるのは、「自他を善化し、万物を浄化する」であります。自他というのは、自分と他人、自分も他人も善くし、さらに自分と他人だけでなく、あらゆるものを浄化していく、宇宙万有を清めていこう、と今泉定助という大変立派な先生が『大祓講義』でおっしゃった言葉であります。この『大祓講義』は、戦前の大倉精神文化研究所で連続講義されたもので、今泉先生の代表書のひとつに数えあげられています。

ところで、今泉定助と申しましたが、ピンとこない方が大半だろうと思います。今泉定助は、戦前は吉川弘文館の編輯監督でした。吉川弘文館の『古事類苑』や『故実叢書』などの事典や叢書類、また『新井白石全集』をはじめ色々な全集を編纂し監督なされました。しかし、戦後はおそらく誤解を生んだ結果でありましょうか、吉川弘文館で出版された戦後最大の日本史辞典である『国史大辞典』に、吉川弘文館の大恩人であった今泉定助の項目が入っていません。実にお気の毒な方といえましょう。

また、今泉先生は行で有名な川面凡児かわづらはんじと親交があったことから、その影響を受けてオカルト的になってしまい、それ以降の著書で参考にできるものはない、とも誤解されています。実は、私も今泉先生の本を読む前は、そうした偏見を少なからず持っておりまし。

ところが、最近「大祓詞」について簡単な注釈書（『建国の使命―「大祓詞」の神学―』伊勢神宮崇敬会、平成二十九年）を書く機会があり、その前にも「大祓詞」に関する研究論文を何本か書きましたが、国語学や歴史学の分野からの研究、またそれらの分野を批判するだけでは、「大祓詞」は良く分からないことに気が付きました。「大祓詞」は、『延喜式』祝詞の中の秀逸な作品とされますが、これはあくまで国文学での評価に過ぎません。その分野では、「大祓詞」を文学「作品」と見ているわけです。しかし、祝詞とは、切実なる想いを叶えるため、厳しい禁忌や修養を経た神様にお祈りするものですから、作品といった文学的な面だけでは不十分で、祈りといった宗教的な面にも注目しなければならぬと思います。すなわち、日本人が持っていた信仰面もしっかりと見なければ、ただ字面だけ現代の字書と共に追った注釈や、作品としてただ鑑賞にふけるだけでは、果たして「大祓詞」を本当に理解することができますのだろうか、と疑問をもつようになったのであります。

このたび、今泉先生のお話をする機会を大倉精神文化研究所からいただき、改めて今泉先生の本を読み直しました。そして、そうした疑念を解く、多くのご教示を得ることができましたので、その成果の一部を、ここで簡単に披露させていただきます。

一 今泉定助年譜

本題に入る前に、今泉定助とはどのような方であったのか、略年譜から簡単に説明しておきましょう。文久三年（一八六三）、江戸時代の最末期の頃に生まれ、昭和十九年（一九四四）、終戦を迎える前の年に八十一歳でお亡くなりになりました。レジュメに古神道家とか、国文学者と書きましたのは、生涯の前半期は我が国を代表する著名な国文学者でありましたが、川面凡児と出会ってからは次第に古神道家に変貌していったからです。

もう少し具体的に説明しましょう。彼は武家の子として宮城県に生まれ、その後、白石神明社の佐藤家に養子に入ります。ここから佐藤定介という名前になりました。その後、東京の神道事務局生徒寮に入学します。これは國學院大學の前身です。ここに十六歳で入学します。その後、幕末の国学者丸山作樂の勧めで、東京大学文科古典講習科に、十九歳の時に入学します。卒業後は、日本の百科事典のなかでは、おそらく最大規模であろう『古事類苑』の編纂に従事します。それとともに、旧制中学校の教員も務めました。旧制中学校とは、國學院大學の母体であった皇典講究所の附属中学校であります。のちに独立して、共立中学校になります。共立中学校は、今の都立戸山高等学校の前身で、その校長先生にもなられました。

國學院大學の前身「國學院」が皇典講究所に創設されるとともに、彼は講師になります。これを機に、東京に残って研究者としての道を歩むことになりましたが、そのため、宮城県に帰れなくなりました。そもそも、白石神社の神主さんになるため上京し、勉強してきたわけですから、これ以上佐藤家にご迷惑をお掛けするには忍びない、と離縁します。それ以降、今泉姓に戻ります。ただし、定介はそのままでした。その後、國學院学監などを辞職して、吉川弘

文館編輯監督になります。また、その間に国書刊行会を立ち上げています。このように、今泉先生は、国文学の世界において、日本を代表する研究者になりました。

ただし、その間に神宮奉齋会理事ならびに皇典講究所協議員や同評議員も務めていることから、神社界や國學院との関係は続けていました。その神宮奉齋会は、本院が現在の東京大神宮にありました。戦前まで、伊勢神宮は国家が管理していました。他のお宮は、たとえ官国幣社といえども、国家が経営して、そして公務員のように給料が支払われることはありませんが、伊勢神宮においては特別でした。ですから、神宮奉齋会は財団法人といえども特殊であり、国式国礼の介助事業をしたのです。

国文学界の第一人者として活躍していた五十四歳の時、川面凡児の禊に初めて参加します。そこから、今泉先生の生き方が変わります。もちろん、その後も皇典講究所や神宮奉齋会での要職は続けました。なかでも、神宮奉齋会の会長に就任しています。伊勢神宮は国民全体の崇敬を受ける神社ですから、その奉齋会とは、国民の崇敬を教導する団体です。その団体の会長を通算六期、二十年以上お務めになされました。

大正十五年（一九二六）のころ、研究が大進展した、と回想しています。六十三歳のころです。川面凡児の禊に初めて参加してから十年目にあたります。その間、おそらくいろいろな試行錯誤をなされたことと思います。今泉先生は、今まで文献を中心に研究してきた方であり、また色々な国文学の注釈書、古典の注釈書を出してきた方であり、もちろん、教科書も多く作られました。そうした方が、まるで正反対の宗教的、すなわち主観的な世界に足を踏み入れられ、今まで積み重ねてきた客観的研究と合致させるのに、十年もかかったのであるうと思えます。川面凡児の行で得られた体験が、学問的にも確信・確証を得られたのが、おそらく十年目の大正十五年だったのでありましよう。

その翌年の六十四歳の時、神宮奉斎会神殿に八神を奉斎します。八神とは、神祇官八神殿の八柱の神様のことです。江戸時代まで神祇官八神殿の神様を、吉田家や白川家が神祇官に代わりお祭りしてきました。この八神とは、天皇が鎮魂祭をする時に関わる神様であります。また同時に、天皇をお護りする神様でもあります。それが神祇官の八神です。ただ、明治になってから、あらゆる神様はすべて宮中三殿のひとつ「神殿」に全部まとめられたことから、神祇官八神もその「神殿」に合祀されてしまいました。そこで、神祇官の八神を改めて神宮奉斎会の神殿に祭り、もう一度、八神の意義を国民に知らしめよう、となされたのであります。

六十九歳、数え年七十の時に、定介を改め、定助に戻ります。その後、七十二歳の時に書かれた『国体原理』、七十五歳の時に出版された『大祓講義』、そして七十九歳の時に出版された『皇道論叢』、この三つの書物が今泉定助先生の三大名著となります。そして、最後に「世界皇化」の絶筆を残して、お亡くなりになりました。

この「世界皇化」の絶筆を残して亡くなったことについては、のちほどお話申し上げたいと思いますが、一般に研究者というのは、だいたい三十代、四十代の頃の研究が一番ピークに達しているのです。そのピークの余勢で五十代、六十代に研究成果を充実したものにまともていきます。ですから、五十代、六十代から新しい研究に切り替えることは、相当なエネルギーが要ることになります。川面凡児の襖にはじめて出会うのが、五十四歳の時。川面凡児の行の神学を学問的にも確信・確証したのが、六十三歳の時。それから十年後に三大名著を次々と出していくのですから、今泉先生がいかに晩年までエネルギーに満ちあふれた方であったかがお分かりになります。では、なぜ晩年までこのようにエネルギーシユな方だったのか、これもお話していくなかで追々ご理解できるかと思えます。

## 二 今泉定助翁の三大名著

今泉定助翁の三大名著は、『国体原理』、『大祓講義』、『皇道論叢』です。これは私が三大名著と勝手に決めたのではなくて、戦後日本大学に今泉研究所（今は残念ながらありません）ができ、その時の研究主任でいらして、今泉定助先生の晩年まで教えを受けていた高橋昊（あきら）という研究者の、次の説によっています。

今泉先生の全著作の中で、先生の思想と志操を理解するための必読の書を挙げると云われるならば、私は躊躇なく「国体原理」「大祓講義」「皇道論叢」の三つを挙げる。それは先生の思想の精髓は、ほぼこの三著に凝集されていると考えられるからである。（解題「国体原理」「今泉定助先生研究全集」三所収、二十一頁）

今泉定助先生のお話をここでさせていただくにおいて、改めてこの三つの名著（「必読の書」）を読ませていただきましたが、やはりこの三つにほとんど言い尽くされていると思います。「国体原理」、「大祓講義」、「皇道論叢」、七十を超えてからお書きになった本、これらがまさに今泉先生を代表する著書なのです。

## 三 『大祓講義』について

ここでお話し上げるのは、そのうちの『大祓講義』であります。『大祓講義』は、さきほどの高橋昊氏の解題によると、

本書は昭和十三年六月、大倉精神文化研究所から初版が刊行された。（中略）この「大祓講義」は昭和十一年か



ら同十二年にかけて行われたものらしく、同十三年になって単行本として刊行されるに至った。(中略) 本書は今泉先生の全著作の中で、最も飾り気のない、先生の生地(注、きじ、素地)そのままが表されていて、私は一番、先生のものらしさを感じ、先生が講義されている風貌が眼前に髣髴として甦って来るのである。(『今泉定助先生研究全集』三、二十七～二十八頁)

そのように解説されています。また、この『大祓講義』に大倉精神文化研究所の設立者であり、所長でいらした大倉邦彦が、次の序文を書いています。

本講義は大祓祝詞ノ注釈的講義と同時に特にその雄渾深遠なる精神的意義の闡明に力を注がれたもので、翁の久しきに互る大祓研究は前人未発の境を開拓して、その真髓を明らかにしてゐる。

この「雄渾深遠なる精神的意義の闡明に力を注がれたもの」との評価は、大倉が美辞麗句をあげつらったものではありません。心底その様に思ったからです。というのは、大倉邦彦自身がよく発言し、著書の中でよく記す言葉に「宇宙心」がありました。まさに、彼の思想のキーワードであったわけですが、大倉が今泉先生の教えに接する中で、この「宇宙心」を文章に記すことを止めていたのです。あとで、詳しく申上げますが、おそらく、今泉先生の宇宙観のスケールの大きさと、自分の考える「宇宙心」とが少し違う、ということを感じたからでしょう。違うといっても間違っている、というのではなくて、自分の「宇宙心」はまだまだ小さい、と思つたのです。今泉先生の「宇宙心」の、あのスケールの大きさに比べたら、自分の「宇宙心」は小さい、とお感じになつたのであらうと思います。ですから、一旦「宇宙心」という言葉を記すのも、発言するのも止められたのだと思います。

#### 四 今泉定助と大倉邦彦

今泉先生と大倉邦彦とは、非常に昵懇の間柄でありました。どういったご縁で今泉先生と大倉が出会ったのかは記録がないので分かりませんが、今泉先生の「日録抄」〔今泉定助先生研究全集〕三所収〕には、「昭和六年十二月十八日午後五時 大倉紙店」とスケジュール表にあるのが、大倉との初見です。それについて、大倉精神文化研究所長の平井誠二先生のご教示により、「研究所沿革資料 通番一四七二『精神運動書翰』〔大倉先生教育事業の記録〕」を拝見させていただいたところ、同書九七頁に「12月18日 午後5時 於大倉洋紙店（第17回）公民教科書編纂の参考に資する為、今泉定介氏に依頼し『神道より見たる国体観について』の御講座を聴いた」とあることから、「日録抄」の通り、大倉洋紙店で講演されたことがわかります。おそらく、今泉先生と大倉とは、それ以前から交流があったでしょう。それについて、同書の昭和三年（一九二八）十一月十日の項に、大倉洋紙店にて昭和天皇の御大典奉祝会が開かれ、そこで今泉先生の御大典に関する御講話を受けた、との記事が見えます。また、翌昭和四年（一九二九）六月十六日には、同じく大倉洋紙店にて「中等教育制度の改革」についての討論会が開かれ、今泉先生と岡泰雄氏（鹿島神宮宮司）の中等教育制度の欠陥についての講話を受けた、とあります。このように今泉先生と大倉との交流は、昭和三年までは確実に遡ることができます。当時、今泉先生は六十五歳、大倉は四十六歳でした。

昭和七年（一九三二）、大倉は、横浜市の東横電鉄「太尾」駅に隣接する丘の上に、プレヘレニク様式の大倉精神文化研究所を、私財を投じて作ります。平井先生のご教示によりますと、研究所の「日誌」昭和七年十一月二十二日の記事に、「神宮奉斎会今泉定助氏ヨリ故実叢書四十冊寄贈ヲ受ク。原田、受取ニ出張」とあり、これは大倉精神

文化研究所附属図書館貴重コレクションの一つ「今泉定助寄贈書」になっております。今泉先生は、研究所完成を記念にご自身が編纂された『故実叢書』四十冊を寄贈されたのです。

大倉は、研究所開所の最初の大事業を検討します。日本の宗教は、仏教が非常に盛んで、仏教には仏典、お経がたくさんあります。また、外国には、たとえばキリスト教に聖書があります。それらに対し、日本古来の精神文化である神道には、お経のような経典がありません。ならば神道の経典、すなわち『神典』を作って、それを最初の大事業にしよう、と考えました。では、『神典』にふさわしい日本の古典とは、いったい何なのか。どれを採用すべきなのか。そこで大倉は、今泉先生にその編纂顧問を依頼しました。おそらく、今泉先生は『神典』編纂に関して、古典の選択など色々なアドバイスをくださったのだと思います。

大倉は終生、今泉先生を敬愛しました。公的な交渉のほかに、私的なお付き合いもしています。たとえば、大倉が六十歳の時に、三度目の結婚をします。三度目の結婚ですから、こぢんまりと身内だけ集めての結婚披露宴でした。ですから、親友と両家の親戚の方だけの披露宴でしたが、その中に今泉先生も入っていたのです。その時の集合写真の後列に、長く白い髭をたくわえた今泉先生が写っています。こうした内輪の披露宴にまで招待するわけですから、大倉が今泉先生をいかに信頼し、敬愛をもって接していたかがお分かりになるかと思えます。

## 五 大倉邦彦の宇宙心

大倉邦彦は「宇宙心」という言葉を、坐禅との関係からか重視していました。『感想』は、大倉邦彦の思想を吐露した雑誌です。大正十四年（一九二五）から毎年発行し、無料で配布しました。ですから、最初から最後まで全部大

倉邦彦の思想であります。この第一巻から「宇宙心」という言葉が出てきます。その中から一部をあげてみましょう。人は心なり、心は人なり、心は宇宙心、大自然、永遠の生命、無限の力（神？）に繋がる故に人の心は無限の威力である。されどこの神秘を意識せざれば恰も埋没せる鉱石を捨て置くに異ならず。『感想』其一、大正十四年）宇宙心を体得した人は人間一切の醜さを憎む事は出来ない。宇宙心は醜さを抱擁する。これを真の愛と云ふ。『感想』其二、大正十五年）

宇宙に存在する一切の事象は法則に逆ふ事なく千変万化しつつある。此の現象、此の力、此の法則を宇宙心と呼ぶ。山河、草木、天体も宇宙心のままに変化しつつある。吾等の生存も亦宇宙心を離れてあり得ない。此の法則に従ふ事が正であり、必然であり、可能である。『感想』其四、昭和三年）

宇宙心は一切の根元である。草木に現れては生成し、無生物に現れては物理、化学の現象を生じ、人間に現れては人体人道を出現し、創生発展せしめる。『感想』其六、昭和五年）

人間は大自然に対してあまりにも傲慢である。宇宙万物は人間の為に備へつけられてゐると考へたり、人間のみが幸福と絶対自由を享受すべきだと信じたりしてゐる。かかる人間程、我儘で慾張りで得手勝手なものはあるまい。反省と自制と忍耐と精進の修行をするならば、何程か宇宙心に近づき、宇宙正法の邪魔ともならず地上の存在を許されやう。『感想』其八、昭和七年）

このように、「宇宙心」という言葉は、毎号出ていたことがわかります。大倉邦彦は大実業家として大変有名な方です。多くの従業員をたくさん養つておりましたし、たくさんさんの会社を経営しておりました。社会とのつながり、国家とのつながりを積極的に作ってきたわけですから、社会や国家に対する言及も『感想』の中には多く見られるわけですが、ここで語られる宇宙心には、国家や国民との関係は見られません。どう見ても、これは個人本位の宗教的な

宇宙心でしかありません。要するに、自分の心を宇宙心に近づけることを使命とした、個人の人格を高めるところに重点が置かれています。ですから、宇宙心を理解することと、宇宙心を体得することが、人格の形成において大変大事なのだ、というわけです。人格の形成が高まって、高まって、高まっていけば、自然と周りにも良い影響を与えていくようになるわけでありませぬ。

大倉は禅宗の影響を受けていて、日頃から坐禅をしていました。この記念館ホールの下にギャラリーがありますが、かつては坐禅の部屋でした。そこで坐禅をして宇宙心と一体になろうとされたのでしよう。禅の世界では、宇宙心と一体となって悟りを啓くことが、人類の幸福につながる、といえます。つまり、修養によって人格を形成していき、宇宙心を自分のものにする、それが目的になるわけです。ところが、この宇宙心という言葉をもットーとしてこられた大倉が、昭和七年（一九三二）の『感想』を最後に、「宇宙心」が見えなくなりませぬ。昭和八年の『感想』九には、宇宙心という言葉は消え、宇宙という言葉が出来るだけです。

吾が呼吸脈搏は宇宙生命の呼吸脈搏である。吾が生命は宇宙を生かし、宇宙に行かされて居る。かくして吾が生命は日本の生命を生かし、日本国の生命に生かされて居る。天皇は日本の心臓であり、吾はその脈搏である。

吾は日本国を愛するが故に吾を愛する。（『感想』其九、昭和八年）

「吾が呼吸脈搏は宇宙生命の呼吸脈搏である」とは、おそらく宇宙心を体得することによって感じ得られるものから、以前の宇宙心がこういう形で残ったのでしょうか、宇宙心という言葉自体は見られなくなりました。つまり、昭和七年を最後に『感想』から「宇宙心」は消え、翌年から「宇宙」という言葉が出るのみとなりました。その代わりに「産霊<sup>ハスビ</sup>」という言葉が出てくるようになります。

神ながらの道は産霊の活動であり、神の働きであり、真理の姿である。主観に着色された学問や宗派に囚われた

宗教や私心ある活動でないならば、それが即ち神ながらの道である。〔感想〕其九、昭和八年)

産霊の働きは止む時なく万象を生成化育し皇国を発展建設しつつある。されど産霊の働きに逆らんとするものは内外に待ち構えて居る。それは、その働きを成就せしめんとする反作用である。その反作用の取扱ひ方は産霊の神が吾等に与へた試練である。〔感想〕其十、昭和九年)

一つの事物の存在は複雑極まる雑多な諸原因が綜合帰一して始めて産み出されたものである。それ等一切の働きと可能性とを総称して産霊の働きと云ふ。人々は産霊の働きに参加して神業を扶翼しつつあるのである。その果積を独占しやうとしたり、又は一集団が之を壟断すべきだと思ひ違ひしてはならない。神を交へての穩当な分配のみが許される。〔感想〕其十三、昭和九年)

このように、「産霊」という言葉が、「宇宙心」に代わって出てきたのです。この大倉の心境の変化には、少なからず今泉先生の影響があると思われれます。特に当時、今泉先生が、大倉精神文化研究所でなさった二つの講演に、注目したいと思います。一つは、「文献と行事」と題した講演を昭和七年十一月九日に、大倉精神文化研究所の臨時神道講習会で行い、その講演録「臨時神道講習会叢書」第九輯『文献と行事』が大倉精神文化研究所から昭和八年四月十五日に刊行されています。もう一つは、「皇道の原理」と題した講演を昭和八年十月二十八日に行い、その講演録「日本精神講習会叢書」第十一輯『皇道の原理』が、大倉精神文化研究所から昭和十年(一九三五)四月九日に刊行されていたのです。

この二つの講演の内容は、実はこれからお話し申し上げる「大祓講義」のダイジェスト版で、前者は文献、すなわち客観と、「行事、すなわち主観とを兼ねたものが学問である」とします。これは「大祓講義」で説かれる主客一致、心肉一体の考えに通じるもので、講演はその後、禊、祓、禊魂、そして大嘗祭へと続きます。後者では、「ムスビと云

ふものの原則原理が即ち發展、進歩、統一と云ふ意味より起るものであるから、宇宙万有は必ず發展進歩統一の意を持たぬものはない。宇宙は無限の發展、永久の進歩、是が宇宙の心であり、造化の神の御心である」（一四頁）と説明し、それを体現なさるのが天皇である、といえます。後者の講演は、前者を前提に、より詳しく論じたものになっています。そして、それらを総合的に説いたのが「大祓講義」なのです。

この二つの講演を聴いた大倉は、宇宙の原理原則である「産靈」について得ると共に、従来の「宇宙心」を反省して、以降『感想』にそれを説くことを止められたのかもしれない。

実は、この「産靈」という言葉こそが、今泉先生が川面凡児の行学ぎょうがくから得た神学のキーワードでありました。「産靈」という言葉は、それまでまったく大倉の『感想』に出たことのない言葉です。その「産靈」という言葉が、昭和八年に『感想』に初出してから、それまで頻繁に出て来た「宇宙心」が反対に出なくなるのは、いかに今泉先生の影響を大倉が強く受けていたかが、こういったところからも伺えるわけです。ちなみに、それから十年後の昭和十七年（一九四二）に、大倉は『産靈の産業』（大日本産業報国会）という題名の本を出しています。

## 六 今泉定助と川面凡児

ところで、今泉定助先生は、川面凡児とどういうご縁で結び付いたのでしょうか。今泉先生は、川面翁とは知り合いではありませんでした。そこには川面凡児の教えに大変な関心を示し、自分もそのように生きようとした方がいたのです。その方とは、日本海海戦で東郷平八郎元帥のもとで参謀を務めた秋山真之中将であります。秋山中将は川面凡児の篤い信者であって、この教えを何とか弘めなければならない、と考えていました。しかし、川面凡児の教えは、

当時は学者から新宗教まがいのものとして、全く相手にされていませんでした。それでも秋山中将は粘り強く、この教えは大変大事だから、なんとか学者に伝えて、理解してもらうようにできないだろうか、と考えたのです。その時に、秋山中将と大変仲の良い葦津耕次郎という神道家が今泉先生と知り合いました。そこで、今泉先生に一度川面翁の教えを聞いていただき、また行にも参加していただけないか、と中将は葦津に依頼します。それに応じた葦津耕次郎が、今泉先生に川面凡児の教えを伝え、行への参加を嘆願したわけです。もちろん、世間では川面凡児とは、何か変な禊の宗教をやっている人、と誤解されています。しかし、そうではない、大変大事な教えを説いていらっしやるので、今泉先生にぜひ参加していただき、先生の目から見て川面翁の神学がおかしいのか、世間が誤解しているのかを確かめていただきたい、とお願ひしたのです。葦津は、おそらく断られるだろうと思っていたらしいのですが、今泉先生は「わかった、出ましよう」と二つ返事で受け入れて下さったそうです。

今泉先生は、それ以降、だんだん考えが変わっていきます。一方、世間では、天下の国文学者が一新宗教の教祖のように思われている川面凡児の行に参加するようになったので、気がおかしくなったんじゃないか、と噂します。しかし、今泉先生は気にしません。彼は江戸時代の国学者の説は、非常に影響力があるだけに、かえって我々の思考をストップさせてきたのではないか、との疑念を以前から持っていたからです。そして、そうした疑念を解決する方法は、一体どこにあるのだろうか、と常に探しておられました。そうした時に、川面凡児に出会い、その解決法を発見したわけです。川面凡児を今泉先生に紹介した葦津は、その後若くして亡くなります。その時の回想文で、今泉先生はその間の様子と、川面翁に引き合わせてくれた御恩に感謝しています。（葦津珍彦「今泉定助先生を語る―その思想と人間―」『今泉定助先生研究全集』一より）

正直に云へば、私は沢山の先輩あり、知友朋友もあつたが、葦津君以外の人からは、真に教へられたと思ふ様な



事は余りない。(中略) 私が今日異色ある学問の建設に志し、国学研究に一つの新しい道を加へるに至ったのは、同君の協力影響に待つ所が著しい。葦津君との往来は極めて繁く、会ふ度に飽かず論じた。大正十五年の頃は、私の研究が特に進んだ頃であつた。毎月の様に変つた。その頃、葦津君は私に会つては、研究の進歩、向上を喜んでくれたが、当時の印象は特に深い。(行弘札編纂『葦津耕次郎翁追慕録』あし芽会、昭和十六年)

まさに、今泉先生に川面凡児を引き合わせたのは「葦津君」であり、そして今泉先生が著名な国文学者から古神道家になっていくきっかけを作つたのも「葦津君」なのだ、と大変感謝しています。この「異色ある学問の建設に志し」とは、前人未踏の茨の道を、五十半ばにして一歩一歩踏みしめながら切り拓いていった、苦悩を物語るものといえましょう。その結果、「国学研究にひとつの新しい道を加」えるに至つたのであります。

では、今泉定助は川面凡児からどのようなものを受けたのでしょうか。それについて、今泉先生が川面翁の研究業績を、次のように評価しているのが参考になりましょう。

川面先生の我が国学史上、思想史上に於ける大なる業績は、之を一言にしていへば、祖神垂示の靈魂観の展開にあつたのである。(中略) 禊祓の根本原理たる直霊の徹底的研究によつて、直霊、和魂、荒魂の直霊体系を立て、産霊体系と直霊体系とを以て、靈魂観の二大根幹としたのである。その深遠廣大なる大研究は、よく先人未発の境を拓いて、我が古典の根本精神を闡明し、四大人を始め従前の国学者の未解決の難問に解答を与へ、之を以て我が国体が宇宙の真理を実現するものなる所以、世界万国に卓絶せる所以を、徹底究明したのであつた。(今泉定助「川面凡児先生の業績について」『今泉定助先生研究全集』三、六〇四～六〇五頁)

「我が国体が宇宙の真理を実現するものなる」理由を、「川面先生」は明らかにされたといひます。この「宇宙の真理」というのが、先ほど来の大倉の「宇宙心」にもつながるわけです。そこで、大倉邦彦の「宇宙心」と、今泉先生

の「宇宙の真理」とは、どこがどう違うのが次の問題になります。

## 七 大祓とは何か

ここから、本題の『大祓講義』の解説に入ります。大祓とは何か。そこからお話し申し上げたいと思います。

大祓とは、古代から朝廷を中心に、全国で毎年六月と十二月の晦日、要するに六月は三十日、現在の暦でしたら、十二月は三十日ではなくて三十一日に行ってきた祓の行事です。現在でも、宮中をはじめ全国の神社などで行われています。本年十一月に行われます大嘗祭の時にも、大祓は行われます。

大祓では、「大祓詞」が読み上げられ、参列者は各自切麻で心身に付着した半年間の罪や穢れを祓ったり、人形ひとがたにそれらを寄せつけたりして、行事終了後、それらの祓具はらいものを河や海に流します。これは大祓の一般的な解説になります。今泉先生は、物事には必ず表と裏があるといえます。これは表の説にあたります。それに対して、今泉先生の大祓論とは、祖神垂示による宇宙論、彼我一体説にもとづき論じられた神学が語られます。それが裏の説になります。

第一に大祓は、覆載、おほひつつむと云ふ意味があります。天の覆ふ限り、地の載する限りを祓ふの意味であります。第二に「おほ」「おふ」音通で、「追ふ」といふ意味で悪魔を追ふ意であります。又「負」といふ意味も持つて居る。強い者が弱い者を背負って行く意味であります。負担に堪へない人があつたならば、其の人の分まで同朋が背負って行ってやらうといふ意味であります。（『大祓講義』四十九頁）

強い者が弱い者を背負っていく、要するに人のことを考える、自分のことはさておき、人のことを考えるのが彼我一体説です。自分だけじゃない。自分さえよければ良い、というのではない。自分も相手も皆同じなのだ、という説

です。ですから、相手が困っているならば、自分が背負ってやる、という考え方があります。大祓の「おふ」とは、そういう意味があるというのです。まさしく、大祓とは相手を思いやる祓なのです。今泉先生は国文学の第一人者でありますから、古典に「大」という字が付く場合、それは天皇か天照大神しか付かない、とこの講義でもおっしゃっております。ただ、神学的にみれば大祓の「大」というのは、非常に大きな、広い意味を持っている、と説くのです。

## 八 今泉翁の善悪交替論批判

今泉先生は、本居宣長の代表的神学のひとつ「善悪交替論」を否定します。これは大祓、禊祓を軽視した悪い説だ、というのです。

（「本居先生」のように）善い事があった後に、悪い事が必ず来るならば、禊祓や祈願をする必要がないのでありまして、この善悪交替論が禊祓軽視の弊害となつて、古人の大思想を削いだのであります。（『大祓講義』十三頁）

そもそも、この「善悪交替論」とは何なのでしょう。宣長は『古事記』という『古事記』の大注釈書の中で、人は人事の道理から神事を推測する、といっています。要するに、人は神様のことなど分かりませんから、人事でおこなわれることを参考に、おそらく神事もこうなのだろう、と人事をひとつの例として神事を推測する、というのです。しかし、私宣長はそうではない、といっています。私は『古事記』や『日本書紀』などの研究を通じて、神代の研究を徹底的にしたので、神事の道理がどのようなものか分かっている。よつて、私は神事の道理から人事を推測することができる、というのです。その神事の道理が、「善悪交替論」、すなわち吉凶善悪交替史観のことなのです。つまり、わたくしどもの身体に宿す魂の中には、吉善と凶悪の要素をともに持ちます。そのため、吉善の状態であっても、もう

一方の凶悪の要素がはたらくと、凶悪の状態へと転回する。ただし、凶悪の状態になっても、吉善の要素が働く、吉善の状態へと転回する。そうした吉善から凶悪へ、次に凶悪から吉善への運行は、神代から不変である、というのが凶吉善悪交替史観なのです。この神学的史観は、その後の国学者等に多大なる影響を与えました。

この運行を、具体的に神代を事例に説明してみましょう。たとえば、神代でイザナキ、イザナミが国生み、神生みをなさった話があります。日本の国土や自然を、神としてつぎつぎに生んでいかれた。これは大変善いことですから、吉善となります。しかし、途中で人の生活にとって必要不可欠な、火の神様をお生みしたことが原因で、イザナミは大火傷をして、それがもとでお亡くなりになります。吉善の状態から、一転して奈落の底へ突き落とされたことになります。これは凶悪です。国作りは未完成のままでしたから、イザナキはそれを遂行するため、黄泉の国まで行き、イザナミを連れ戻そうとします。ところが、かえって殺されそうになり、命からがら逃げ帰ります。奈落の底に落とされ、悲しみに伏せる間もなく、自身の命まで奪われるような危険な目に遭うわけですから、これは大凶悪といえましょう。しかし、なんとか逃げ帰って、イザナキは黄泉の国で身体に付いた穢れを、筑紫の日向ひむかの橘たちの小門せとのアワキハラで、禊によって祓い、身を清めます。そうすると、天照大御神がお生まれになりました。天照大御神は、高天原を主宰する神様であり、皇祖神でもありますから、吉善であります。その後、その神様のご子孫が、地上に降臨して歴代の天皇になりますから、それは大吉善といえましょう。このように、大変悪い状態から大変善い状態に変わったわけです。

ところが、そのまま善い状態が続くかといえば、そんなことはありません。高天原で須佐之男命が大暴れた結果、大混乱になります。ふたたび凶悪の状態に戻りました。さらには、天照大御神が天岩戸にお隠れになったため、高天原どころか地上まですべて真っ暗闇になり、世界大混乱が発生しました。大凶悪です。今まで善かったものが、一気

に最悪な状態に落ちてしまうのです。このように、神様のいらっしやる神代ですら、善いことは続かないのです。

ただし、このように悪くなっても、いつしかまた善くもなります。それが時代運行の不変の論理なのだ、と宣長は説きました。これが「善悪交替論」なのです。ですから、善であったって、いずれ悪い状態になる。吉の状態が凶になる。しかし、凶の状態であっても、いずれは吉になるだろうから、凶の状態の時には静かに吉の状態が来るのを待ちなさい、と教えたわけでありませぬ。

その論を、今泉先生は猛反対した。それならば、わたくしどもは何のためにご祈願やご祈禱をするのが分からないではないか、と。皆さん方だって、お正月になれば、今年も家族が安泰でありますように、と神社や寺院などにお参りして家内安全のご祈願をなさったり、また病気で困っている時であれば、病氣平癒のご祈願をなさったりすると思います。しかし、宣長さんの教えに従えば、その様なことをする必要はない、といえましょ。善い時があれば、悪い時だってあるので、放っておけばよいからです。悪い時だっていざれ善いことがあるから、しばらくじっと待っておけばよい、と教えるのです。しかし、人間そんなに気長く待てません。一刻を争うことだってあります。だからお祓してほしい、お祀りしてほしい、と願うのが人情というものなんです。お祓の力によって、凶悪の状態を吉善の状態へと変えていく、時の運行を待っているといつ善くなるか分かりませんから、神様のお力を借りて吉善へと変えていく、それがご祈願であり、ご祈禱なのです。

今泉先生は、宣長説の影響力が強すぎたせいで、特に明治以降の神道家は、袂や祓を軽視するようになった、といえます。これは神道の発展にとって大変まずいことである、と強く批判しました。そもそも、宣長は、あらゆるものは外国の思想に侵されている、しかも外国の思想は間違っているから、全部取り除きなさい、という。外国の思想は「からごころ」だから、「からごころ」を拭い去って、「やまとごころ」に帰りなさい、と盛んに主張しました。それ

に対し、今泉先生は、「本居先生」の「善悪交替論」だつて「からごころ」ではないか、と批判するのです。

「善悪はあざなへる繩の如し」といつた支那流の思想、或は仏教の因果応報の思想に囚はれて、創造発展の生氣澆刺たる我が禊祓の大思想をまるで了解することができなかった（「大祓の根本義」『皇道論叢』三六九頁）

このように、「善悪交替論」こそ、「本居先生」の誤認による弊害だ、と今泉先生は強く批判したのです。今泉先生が川面凡児の行を、世間から新宗教のようなものだから相手にするな、と忠告を受けても受け入れなかったのは、ご自身が国学者の説に以前から疑念を抱いていたからなのです。それをなんとか解く方法はないのか、と思案していたなかで、川面凡児の行法に出会い、いわゆる回心したわけであります。その結果、今泉先生は、やはり「本居先生」の「善悪交替論」は間違っている、と確信・確証したのであります。

## 九 禊祓は身だけを浄化するのか、それとも心までも浄化するのか

もうひとつ、お祓において、大きな問題があります。これも宣長の『古事記伝』での発言に対する批判です。宣長は、禊というの、身体に付着した穢れを祓い取り除くことであり、世間でいっているように、心に付着した穢れまでも祓い取り除き、心を清めるようなことはない。実際、そうしたことは文字に書いていない。たとえば、『古事記』には「御身之禊」とあり、『日本書紀』には「盪滌身之所汚」と書いてあって、どれも「心」の字など出てこないではないか、といえます。

凡て禊祓は、身の污垢ケガレを清むるわざにこそあれ、心を祓ひ清むと云は、外国の意にして、御国の古へさらにさることなし、もし心を主とせば、御心之禊とこそ云べきに、さはなくて、上段にも御身之禊と云ひ、書紀にも盪滌

身之所汚、とあるはいかに、(中略) 心の清き穢きを云も、常のことなれど、祓をして心を清むと云ことはなし  
〔古事記伝〕六)

このように、禊祓は身体に付着した罪穢れを祓い清めるのであって、心に付着したものを祓い清めるものではない、と宣長はいいます。それに対し、今泉先生はそうではない、と反対します。そして、我々が罪や穢れを受けるのは、「我の人格統一が足りないから禍津毘となるのである。責めは皆我に存する」(『大祓講義』七頁) といいます。すなわち、罪や穢れを受けるのは、自分自身に問題があるからで、精神統一をしていなければ、災いをもたらす禍津毘神の御霊が、かならず心身に侵入してくる、というわけです。ですから、罪穢れを祓い清める前に、人格の統一を常に心がけていなければならない、と教えたのです。

今泉先生は、本居宣長を大変尊敬されていて、書物にはかならず「本居先生」と表記します。しかし、時には「本居先生」の学説といえども厳しく批判しました。なぜ、この禊祓説を批判するのか、というと、「人はムスビの神の靈魂を受けてこの世に生まれたのであるから、心肉不二一体であるから」(『大祓の根本義』『皇道論叢』三七〇頁) だ、ということです。ここに「ムスビの神の靈魂」という言葉が出て来ます。大倉邦彦のキーワードが、昭和八年(一九三三)を境に「宇宙心」という言葉から、「産靈」という言葉に代わる、その「産靈」が、これなのです。人は「ムスビの神の靈魂」を受けてこの世に生まれたのだから、心と肉体が二つ別々だ、ということはあり得ない。心肉は一緒であり、一体である。だから、心が乱れたら肉体も乱れる、肉体が乱れば心も乱れるのは、当然のことなのです。罪穢れは、身体だけでなく、心中にも付着する、というのが今泉先生の考えです。本居宣長は、罪穢れは身体だけに付着するのだから、お祓は身体に付着したものをだけを祓えばよい、といいます。それに対し、今泉先生は、そうじゃない、罪穢れは心身ともに付着するのだから、禊祓で心身ともに祓わなければならない、といいます。そして、大祓

も心身を祓う行事である、というのです。

一体一つの行事には必ず表と裏とがあるものでありますが、大祓に於ける表は肉体を祓って心に及ぶ事であり、裏は心を先づ祓って肉体に及ぼす事であります。此の表裏は必ず相伴ふものでありまして、此の両者を必ず一緒に見なければなりません。（『大祓講義』五一頁）

今までは、片方だけしか見てこなかった。両方を見てこなかった。しかし、我々は「ムスビの神の靈魂」を受けてこの世に生きていたのであれば、心だけムスビの神からもらった、といえるでしょうか。ならば、肉体は誰からもらったのでしょうか。心も肉体もすべて「ムスビの神の靈魂」を受けて、この世に生まれたのであるならば、心肉をわけて考えてはいけない、同じように見なければならぬ、と今泉先生は説きます。これも行ぎょうによって彼が得た体験からくる、ひとつの確信であり、確証であつたといえましょう。

#### 十 祓と禊とは何か―今泉翁の神学的解釈―

それでは、今泉先生のいう禊祓とは、どういったものなのでしょうか。今泉先生は、行事には必ず裏と表がある、といえます。裏というのは主観であり、また内面のものである。表というのは客観であり、外面のものであります。主観、客観といえば、まるで別々のように考えてしまいますが、我々のご先祖様からいただいた教えでは、主観も客観も一緒に見る。すなわち、主客一体である、といえます。ですから、祓を見るにおいても、禊を見るにおいても、両面から見なければならぬ。今までは何もかも一方的にしか見てこなかった。片面でしか見てこなかった。しかも、客観というものしか見てこなかった。今泉先生も今まで大國文学者であつた、ということは、厳格な客観主義者で



あった、ということになります。客観的に見ない限り、国文学の大家にはなれませんが、主観を強調したら、信仰か、神学か、と誤解されます。彼が吉川弘文館の編輯監督になり、あらゆる全集を編輯していく。『古事類苑』も編輯していく。そのようなことができたのは、彼が客観的な研究者であったからです。しかし、それでは本居宣長と全然変わらない。もちろん、「本居先生」を尊敬していたのですから、当時としてはそれでよかったです。しかし、同時に国学の限界を、そこに感じていたわけです。ものの見方には主観もあるのだと。主観と客観の両方あるのだと。そして、我が国の教えに、その両方があることに気付くことで、またそれを確信・確証することで、彼の研究は飛躍したわけです。

では、祓を客観と主観の両面で見るとは、どういったことなのでしょう。まず客観は、「はらふ」、埃などを「払ふ」こと。振るう、振動する、筋肉皮膚等を振動させながら、汚と穢とを払拭する、という意味がある。これが客観的に見た祓です。一般の辞書にもこのように書いてある。しかし、それだけでは一面的です。主観を見ないといけない。ここに何が秘められているのかを見ないといけない。実は、「はらひ」というのは、「はるひ」のことだといえます。「はるひ」とは、漢字で書けば「張る壺」となります。我々は「ムスビの神の靈魂」で誕生したのですから、必ずその靈魂が心身にあるはずです。なかったら人間、動物、あらゆるものは存在しませんから、あらゆるものは「ムスビの神の靈魂」を持つているわけであります。この「ムスビの神の靈魂」をそのまま發揮している状態を、直靈なほひといえます。ですから、直靈を我々は心中に秘めているわけです。もちろん、發揮しているかどうかは、人それぞれによるわけでありますけれども、必ず持っているわけです。ですから、その心中にある直靈を發揮させて、内から拡げていきなさい、ということです。そうすれば、身体の内に入り込んだ穢れが、押し出されてぼろぼろと落ちていくのです。それが祓のもう一面なのです。ですから、祓とは、目に見える埃を払うように外側だけ祓うのではなく、祓によつ

て心中にある直霊を發揮させ、その力によって、心中に入った穢を内側から追い出していく意味もある、というのです。今泉先生は穢れや罪を祓い去れば、もうこの状態で神様になっている、もとの状態の神様に還っている、といいます。なぜならば、我々は神の子だからです。「神の子は神」だからです。祓は、その状態に戻す働きがあるのです。詳しくは後で述べます。

さらに、念には念を、ということと禊をします。もちろん、禊にも客観と主観とがあります。禊とは、水で身体を注ぐという意味で、これは辞書的な意味であります。それは客観的な学問の世界では通じますが、それだけでは古代人の信仰には近づけません。やはり、禊に隠された言葉を理解しなければなりません。水を注ぐように霊をみなどんとん身体に注いでいくのだ、と理解しなければなりません。自身の霊に神聖な霊を注ぎ入れることによって、祓い残っている罪咎を、また停滞している穢を、内側から神聖な霊で削ぎ去っていくのだと。ですから、禊の実践とは、水に浴し潮に浴して、肉体を清浄にし、精神を潔白にすることとともに、「此の水を神の霊に例え」(『大祓講義』九〇頁)て禊をすることも求められるのです。

これは、今泉先生が無茶苦茶なことをいつているわけではありません。たとえば、神社にお参りにいけば、神社の前には必ず川が流れていることに気が付くでしょう。昔は、その川で禊をしたうえで境内に入りました。現代人のように気軽に、犬の散歩と一緒に境内に入っていく、そんな発想は昔の人にはありません。神聖な場所に犬を連れて入っていく行為は、昔の日本人には思いも及びませんでした。境内に入るためには、前の川で禊をしてから入るのが、本来の神社の参拝の仕方です。ですから、そうした川は、禊川とか御裳濯川とか祓川といわれます。なぜ、お宮の前に流れる川で禊をするのか、というと、そうした川はだいたい神社の裏山から流れてきているからです。神社の裏山とは、一般に神の宿る所であります。神様がその山に鎮座されているのなら、たやすく山に入ってはいけません。現代

人のようにピクニックだ、ハイキングだ、登山だといつて入るわけにはいかないわけです。それゆえに、山の神様と人とのつながりは川しかなかったのです。川が唯一、里人と山の神とを繋ぐパイプ役だったのです。そして、そうした川には神様の霊が籠もる、と考えられていたのです。

たとえば、奈良の大神神社や、京都の下鴨・上賀茂神社には、弓矢が川から流れてきた、という伝承があります。お姫様がその弓矢を家に持ち帰ると、それが神様になった、という伝承です。また、昔話で川から流れてきた桃の中から子供が誕生します。桃太郎です。その子供が将来、村人を困らせる鬼を退治する力を持つ武人になります。これも神様なのです。このように、神の山から流れてくる川に霊力が籠もっている、と昔から誰もが信じていたのです。よって、そうした川で心身を清め、神様の霊力をいただくわけです。

海の場合は、海の彼方に常世の国がある。神様の世界がある。そこで、常世の国と人とを繋ぐパイプ役が海になるのです。海の砂や塩は、神様の世界から流れてきたもの、と見なされます。ですから、それで心身を清めたり、また直接海に入って心身を清めたりすることで、神様の霊力をいただくわけです。

このように、禊とは今泉先生がいうように、神霊が籠もる川や海で心身を清めることで、その水や砂や塩を神霊と見立てて自分の霊に注ぎ入れ、その力で内側から罪穢を削いでいくもの、と考えられていたのです。

ですから、今泉先生がおっしゃる説は、決して無茶苦茶な話ではないわけでありまして、まして、我々のような凡人ではなく、日本を代表する国文学者であります。万巻の古典を読んできた方でありまして、万巻の古典から得た知識を蓄積してきた方が、やっと十年かけて行との整合性を確信・確証したのでありますから、我々が今泉先生の本を、新宗教の一種として蔑視することは、大いに慎まなければいけないと思います。

## 十一 禊祓の意義

つぎに、禊祓の意義を考えてみましょう。今泉先生は、祖神垂示、すなわち祖神から代々受け継がれてきた日本古来の精神によると、宇宙万有すべては「ムスヒの神の靈魂」から出た、といいます。よって、凶悪の原因とされるマガツヒと、それを吉善へと復元するナホヒとは、ともにこの同一魂から出たこととなります。要するに、悪いことを働くマガツヒという靈魂も、善くしようとするナホヒという靈魂も、もともと「ムスヒの神の靈魂」から現れたものですから、実はナホヒとマガツヒは同じ、ということになります。では、どこがどう違うのか。ムスヒの神は、生成発展のはたらきをする靈魂であり、ナホヒが元来の姿である。それに対し、マガツヒは「ムスヒの神の靈魂」が分裂した相をあらわしたもので、分裂破壊のはたらきをする。ところが、もともと「ムスヒの神の靈魂」であったことから、ナホヒに還り、再び生成発展しようとする性質を秘めている。その「転回の原理を実現するものが、禊祓の行事である」（「禊祓の根本精神」『皇道論叢』三六三頁）と今泉先生はいいます。本居宣長は、それが自然に変わるまで待てばいい、といったわけですが、今泉先生はそうではない、といいます。その「転回の原理」を禊祓の行事によって実現させなければならないのだ、というわけです。もちろん、ナホヒもマガツヒに転回しようとする性質を秘めている。それが行われれば穢れとなる。そこで、今泉先生は「相対分裂性の禍津毘が、絶対統一性の直霊に転回還元することが、禊祓の全意義なのである」（「禊祓の根本精神」『皇道論叢』三六三頁）と説明したのです。

## 十二 神の子は神である

祖神の垂示として、神の子は神である、といます。要するに、日本人は皆神の子である、と教えてきたわけです。たとえば、『古事記』は朝廷で活躍している、また国家に関わる人々のご先祖様の、神代からの活躍を載せるのが目的であったように思われます。そのため、『古事記』は、『日本書紀』以上に神代に出てくる祖神の名前が多く記載されています。たとえば、『日本書紀』は三十巻の大部であって、『古事記』は上中下の三巻しかありませんが、氏族数でいえば、『古事記』は『日本書紀』の二倍も多く記載しています。それはなぜかというと、自分たちのご先祖様が神代から活躍してきたことを記録する必要があったからです。同時に、自分たちのご先祖様は神様であったことを記録する必要があったからです。平安時代になって、『新撰姓氏録』という京および畿内の戸籍帳が出来ます。『新撰』とは、新しく選ばれた、新しく編纂されたということです。とすると、その前に編纂されたものがあるわけです。たとえば、新横浜とは、横浜があったから新横浜になるわけです。横浜駅がないのに新横浜駅を作ったら可笑しな話になります。横浜駅があるから新横浜駅ができるわけです。それと同じで、『新撰姓氏録』とは、前に『姓氏録』があったから、『新撰姓氏録』なのです。では、そのいわゆる『旧撰姓氏録』とは何なのか。『古事記』研究の大家である中村啓信先生がおっしゃるには、それが『古事記』なのです。『新撰姓氏録』を見たら、自分たちの先祖は神様につながるのか、天皇につながるのか、それとも外国のご先祖様につながるのか、がわかります。神様より上の子孫は、天皇の子孫であります。ですから、皇別と神別と蕃別、すなわち帰化人かどうかで分けているわけです。ご先祖様が天皇であるならば、これは別格の方です。ほとんどの日本人は、神を先祖に持つ家です。ですから、我々は皆神の子だ、

ということ、古代から信じられていたわけですから。だからこそ、奈良時代に『古事記』が編纂され、平安時代に『新撰姓氏録』が編纂されたわけであります。それに対して、神の子は神に決まっているではないか。神の子がなぜ人間なのだ。神の子は神だ、と今泉先生はいうわけです。

神なるが故に過を知り、尤を知り、罪を知る。それがあから過たない、尤を作らない、罪を犯さない。神そのままの生活するのが神としての人間の当然の事である。神の子としての人間は、人間としての神たる生活をするのが、其自性であり、持前である。然し、若し神と離れ、神の子たることを忘れると、「許許こころ太久乃罪出武のつみいでむ」多くの罪出で来るであらう。（『大祓講義』一三九頁）

### 十三 神の魂に還ることが大祓の眼目

また、

我々は神の分霊分魂でありますから、万一間違ひを起した時には、再び神の魂に還らなければなりません。（中略）之が大祓の眼目であり、精神であります。（『大祓講義』三九頁）

我々は神の子である。神の子であるならば、神の性質を持っている。ナオヒの霊を持っているわけです。ナオヒの霊を持っているけれども、それを忘れるから、人格統一ができなくなる。そのために、罪穢れにおかされるのであります。だから、その時は我々の心を神の魂にもう一度戻せばよい。もう一度神になればよいのです。それがまさしく禊であり、祓であり、大祓の眼目である、とおっしゃるのであります。

#### 十四 人を祓う資格Ⅱ祓戸の神になること

次の今泉先生の説は、神主さんを対象にしているようですが、そうではありません。「ムスヒの神の靈魂」を受けるものは、誰もが対象になるのです。

祓をするとき云ふのは結局神と合一する事でありませぬ。又人を祓ふ資格を神主はどこから得るか云ひますと、祓戸の神と合一するといふ事に於いて、初めて人を祓ふ資格が出来るのであります。（『大祓講義』三八頁）

#### 十五 神人合一した人の使命

自分が神となって、始めて人を祓ふ事が出来るのであります。本当に我が直霊が開けて、神直日の境地に到れば、自他を善化し、万物を浄化することが当然であります。（中略）どうぞ御互に此の神業を体得して、唯自己を祓ひ、一家を祓ふばかりでなく、人類同胞を神化せしむると同時に、宇宙万有をも神化せしむる神業に精進して、その結果、水にも溺れず、火にも焼けず、乾坤独歩、縦横自在、思ひ立つ日が吉日吉時、向ふ処は吉方吉処、何事も我が為さんとする所を為し、我が云はんとする所を云ひ得るやう精進するのが、大祓の精神であります。（『大祓講義』一五六頁）

とあります。まさに「神直日の境地」に到れば、自分だけではなく、他人をも善化し、そして万物をも浄化する。これが当然の行いなのだ、というわけでありませぬ。

## おわりに

まとめたいと思います。今泉定助先生は、川面凡児の行法に出会うことで、「異色ある学問の建設に志し、国学研究に一つの新しい道を加へるに至った」と告白したように、著名な国文学者から古神道家へと転進しました。そこで得た大事な教えは、祖神垂示、すなわちわが国の祖先から伝えられてきた不変の教え、それによる靈魂観（直靈・産靈）であり、それにもとづいた彼我一体の思想、すなわち宇宙万有一体の思想でありました。

こうした祖神垂示を体得した今泉先生は、大祓の目的を、平和を第一とする神（直靈）の御心と一体、すなわち神人合一するまで人格を陶冶し、それで得られた成果を惜しげも無く他人に分け与える。そして、みんなで宇宙万有をことごとく浄化して、罪穢れによる災いや争いのない、平和な世界を実現する事、と教えたのであります。

今泉先生は、最晩年、病床の中、突然起きて羽織袴に着替え、皇居に向かい拝礼します。なぜ皇居を拝礼するのか、といいますと、直靈を一番体現され、無私の状態で我々に施して下さっているのが、天皇であるからです。「ムスヒの神の靈魂」をそのまま体現なされて、天照大神と一体となつていらつしやるのが、天皇だといいます。彼はその様に考えます。わが国がずっと祖神垂示のままでは、まさしく「ムスヒの神の靈魂」をそのまま体現なさつていて天皇のおかげ、と考えます。天皇がいらつしやるからこそ、我々は宇宙心をずっと持ちつづけることができたのです。しかし、戦争の時代になり、世の中が大変悪くなつてきた。今泉先生は、総理大臣や陸海軍のトップクラスに知り合いがたくさんいます。ですから、こうした天皇をいただく国体論の講義を彼らにするわけです。そして、もう一度日本人に祖神垂示の精神を思い出させよ、彼我一体の精神を取り戻させよ、と総理大臣や陸海軍のトップに



レクチャーするのです。そのうちの一人東条英機は、彼の中学校教員時代の教え子です。ですから、直談判します。しかし、効果がありません。そこで、東条の次に総理大臣になった小磯国昭に期待します。小磯とは昵懇の間柄でしたから、お願いで小磯内閣にレクチャーしていくわけです。あなたがたが日本人としてふさわしい、誇りある日本に返せ、というわけです。そうしたレクチャーを繰り返しますが、昭和十九年をむかえて、ついに病に冒されます。今泉先生はずっと病床に伏していましたが、これではいかん、ということで、急に起き出しまして、家族に羽織袴を用意してくれ、と頼みます。そして、羽織袴に着替え、皇居の方に向かって深々と拝礼するわけです。大変申し訳りません、と。自分はこの国が悪い方にくのを食い止めるために命をかけて講義をしてきた。命をかけて教えてきた。しかし、私の力不足が陛下にご迷惑をおかけすることになり、大変申し訳ない、と拝礼して、最後に「世界皇化」を大書します。宇宙万有ことごとく浄化して、罪穢れによる災いや争いのない世界平和を実現する、これが「世界皇化」の意味するところです。それを大書して、お亡くなりになりました。

「世界皇化」とは、宇宙万有ことごとく平和にする、大祓の精神を意味します。以上のような今泉先生のお考えを伺った大倉邦彦は、いままで考えてきた自分の宇宙心が、いかにちっぽけであったかと改めて感じたことでありましょう。ちっぽけすぎる。これ以上主張することはやめよう、とお考えになって、おそらくこうした今泉先生の講義を拝聴したことで、宇宙心という言葉を書くのを止められたのだ、と思います。今泉先生のスケールがあまりに大きすぎるわけです。それに対し、私の宇宙心があまりにも小さすぎる。これではいかん、と反省なされたのでしょうか。その後、大倉が研究所の修養会で禊を取り入れられたのも、こうしたことが要因にあったのではないのでしょうか。このように、今泉先生の影響を大倉邦彦は一身に受け入れられた。そして、敬愛をもって接せられたのであります。

戦後、今泉先生は誤解を受けられ、まったく相手にされなくなりましたが、今泉定助が大変立派な神道家であった

ことは、以上でご理解できたことと存じます。現象面のみ対象にした学問が、客観的と持て囃される現代において、主客一体の祖神垂示を見直し、今泉先生を再評価することは、学問の幅を持たせる上でも、精神文化を豊かにする上でも有意義である、と思います。そういう気持ちを込めてお話をさせていただきました。ご静聴ありがとうございます。

(付記) 本稿は、令和元年(二〇一九)五月十八日横浜市大倉山記念館ホールにて、大倉山公演会「こころを磨き、からだを鍛える」の第三回講演「自他を善化し、万物を浄化する―ミソギとハラエの意義を読み解く―」の講演録を加筆増補したものです。増補するにあたって、大倉精神文化研究所所長平井誠二先生と同研究員星原大輔氏から、ご教示ならびに資料の提供を賜りました。ここに御礼申し上げます。

### 参考文献

日本大学今泉研究所編刊『今泉定助研究全集』第一巻〜第三巻(昭和四十五年)

#### 第一巻

葦津珍彦「今泉定助先生を語る―その思想と人間―」

高橋昊「今泉定助先生正伝―その国体論と神道思想史上の地位―」

「年譜・著作目録・日録抄」

#### 第二巻

『皇道論叢』と解題

自他を善化し、万物を浄化する(西岡)

第三卷

『国体原理』、『大祓講義』、『川面凡児先生の業績について』と各解題

大倉精神文化研究所編『大祓講義』(三省堂、昭和十七年)

今泉定助著・芳野正朗監修『國體講話』(復刻版、北方新社、平成三十年)

財団法人大倉精神文化研究所編刊『大倉邦彦伝』(平成四年)

西岡和彦「大倉邦彦の神道論」(『大倉山論集』第五十輯、平成十六年)